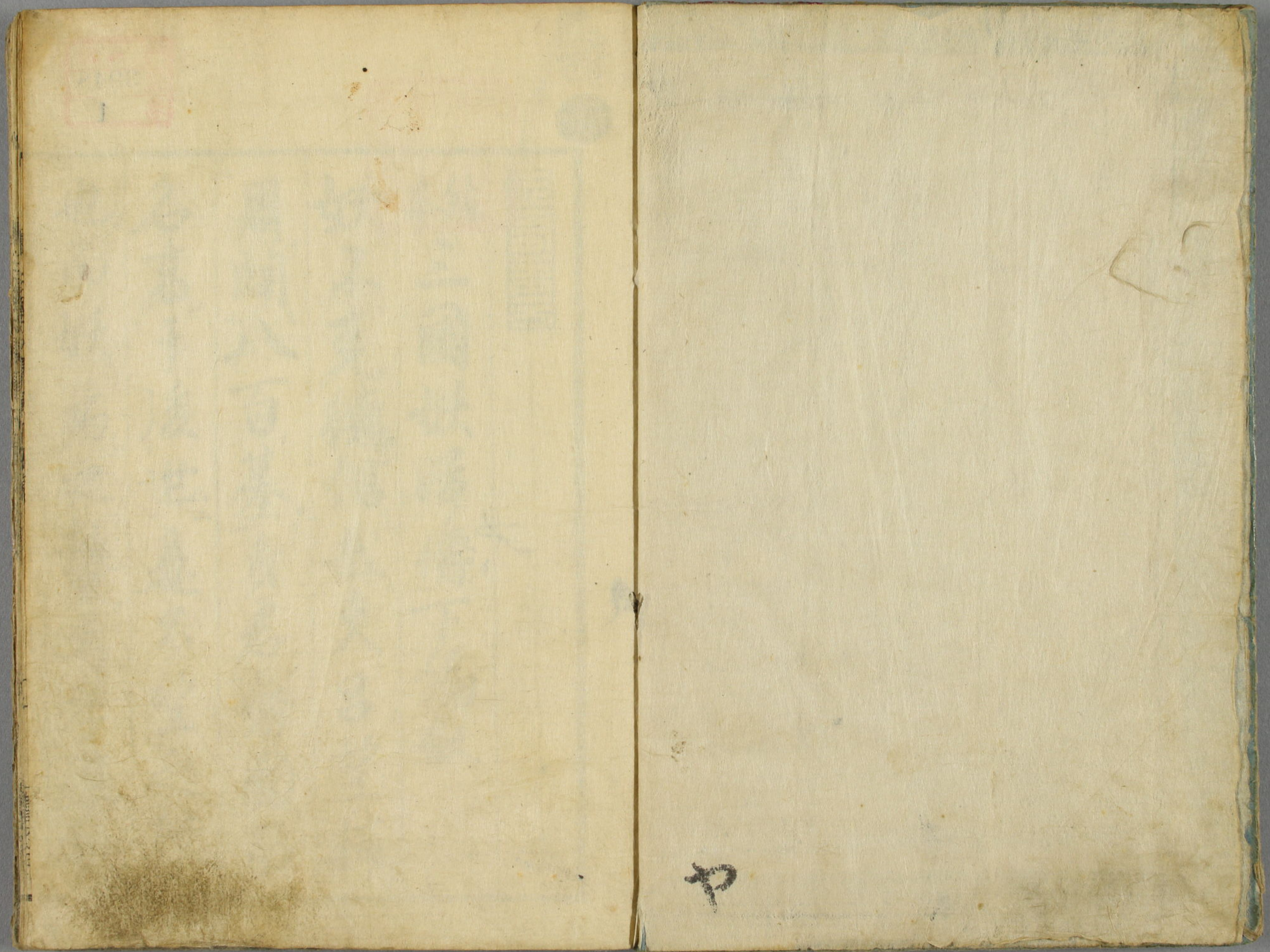


~13
3948
1





Faint red markings, possibly a stamp or handwritten text, located in the upper left corner of the left page.

A small, dark, handwritten mark or symbol, possibly a letter or number, located near the bottom center of the right page.

門 へ 13
號 3948
卷 1

正



三國妖婦傳

三國妖婦傳下編叙

妖不克德信哉夫呂望補

周闡八百基所君齊國而

名高于後世是呂望之德

也而妖為之執焉者婆施

三國妖婦傳下編叙

晉本合川

共

藥療億萬病。身貴西域而
術冠于千古。是耆婆之德
也。而妖為之退焉。秦親樸
著察未幾。幾所列公卿而
業稱于末代。是秦親之德
也。而妖為之潛焉。妖不克

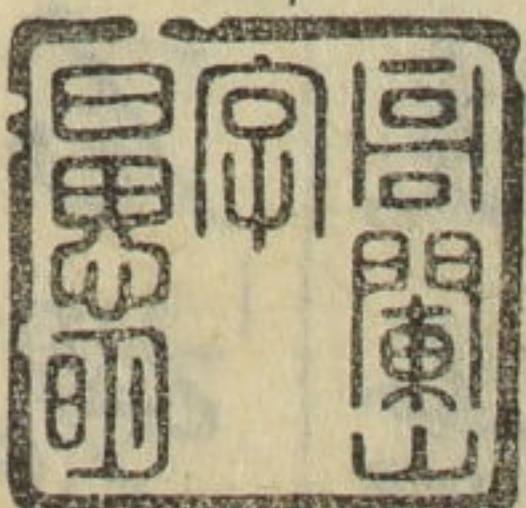
德信哉。抑見怪不怪。無怪
僧玄翁書之。故能鎮石魂
云。所謂德乃文也。自往治
國家文武併用。所謂武乃
兩女之功是也。今茲妖婦
傳下編刊成。因以教言述

三國女妖傳一巻
二
書林合刻

巻之端ニ尔リ

文化二年乙丑初春望

高井伴寬思明



山章水書



繪本三國妖婦傳下偏卷之一

目錄

たまりのまたまりのまヤナチヤナチちちりり くんざよ ふしのまはんはんここししりり かざり
玉藻前たまりのま泰親ヤナチとと回言くんざよ子こ玉藻前ふしのま辨はん口くち流りゅう終します

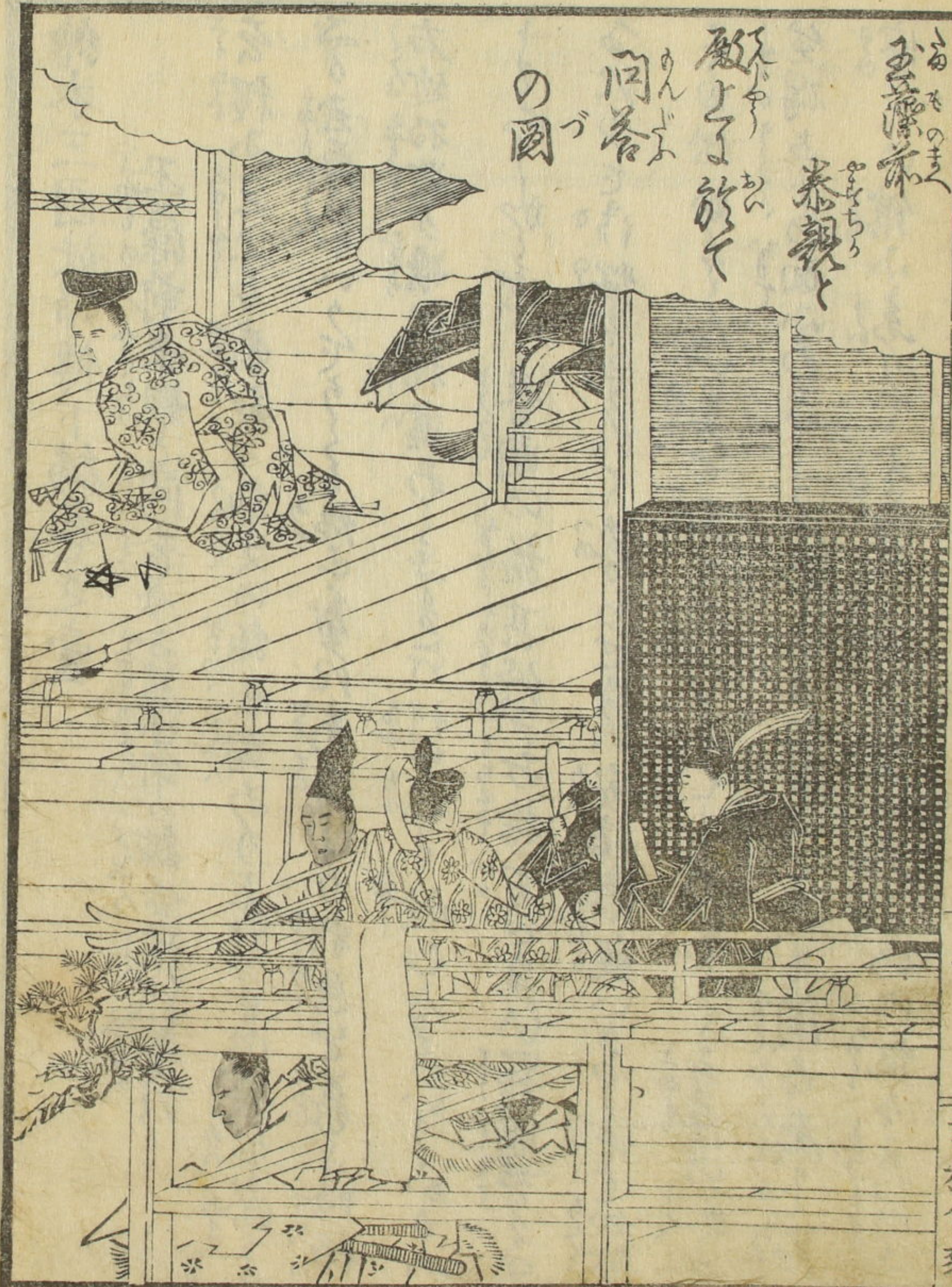
ヤナチヤナチちちりり くんざよ ふしのまはんはんここししりり かざり
泰親たまりのま関かん白はく忠しゆ実じつ公こうのの銀ぎん勘かん文ぶん持ぢ系けいのの圖ず

ヤナチヤナチちちりり くんざよ ふしのまはんはんここししりり かざり
泰親たまりのまととままてて泰たい内ないのの圖ず

たまりのまたまりのまヤナチヤナチちちりり くんざよ ふしのまはんはんここししりり かざり
玉藻前たまりのま泰親ヤナチとと殿上てんじやうにに於おけけ回言くんざよのの圖ず



五郎前
 恭親と
 殿上り
 同答
 の國



平愈師まゝんをうへび勅文と奉り誠忠養ふ事候なり
 凡へくまゝに殿下あつく感心のついで此より願望ありし内
 わりて再び恭親が勅文の抄参達ありし小君も再慈敵
 聞あつとあまに其修ふも捨せらまごつて世悩のうへ小
 展襟候やほしあふ玉藻の糸を昼夜内側をとるれを
 大臣参聞のつゝあつ時も抱うげ小思ひて何れ此ははやく
 づうけ参りけり又も恭親とそれれ事を遂て殿を
 まじり参りて嬉悦化生が御し謔言さうと何れ言候と
 てかくのつゝあや勅許もあつるに恭親を殿上に召さる
 かつ同落子細を召さば明白小分りて明白殿下も衆が虚

言をりつて君臣談いひり処を眼筋よまはしめて世をまゝあつ
 是を聞るにけりて勅免ありしと御ふを小思ひたれ
 この事候御させし日を定の殿上へ恭親を召さる御と恭親
 つもそ勅下りしけるまゝ恭親大に悦び玉藻の糸が御を
 とらぬと當日のつゝ候おそつと待らるが既に今日大内は御
 西籠妃玉藻の糸と對面させしとありて恭親候召されけり
 侍屋御門を通りて武家口より参り扱ひて御席候との上
 めて指差あつんと命令違せし是も人方小もつゝたため
 主上も内禰の内めて上聞は御ふとの最急あつと家々
 きりり君子も其拙を情むと賢賢の格言宣あつと穢小



孝親
百子孫
内乃圖



あれよみぶるごとく見とれてむも空よりらまるとも
 茶麿の葉をわたりてはくはくも死ん公地見よまのの
 たり甲けり玉藻をくると聖の肉乃中央猶小所一
 と稽之れさぬ皇居のとも帝乃信賞減くとも理とこそ
 思ふは安倍の恭親も自然と其威小公座一平休を世
 玉藻のあともか潤しはくはくは海恭親よか當今御
 海くせよのふあまはしてさぶくが業なりと御文を
 いうらういふまありわやんを穿小御して恭親はどあけ日毎
 此惱重くせよと承る臣として誰か公安せん某又御代
 傳く不飛トせよとて理と推易と公演て教を考るに

陰歎の長びる不帝五の徳澤は其判読動文小述る不
 のごころを養同は種くも也と善まは玉藻の恭是紙
 閑陰歎といはづくをさくしてさぶくを誠よらもたぬ
 愚昧の汝明くする眼をわきも盲に降人書紙人
 人ふあんと大遠しく易教お及んぬ惱も是理をりて
 いとん河を天は風雲の變を地は又水火の怪しきあり
 天地をくわくのじいせんや人間はあつとや石時の病死
 喪の禍一天の君たりとも行をや是をのぐるべしを常乃
 風流いふもつて吹消る病の命も皆定まる因縁の果
 小くは河をて病又時來て治を死生命有皆天教のあり



泰親
 関白忠実公
 館勅文の
 持系乃
 圖



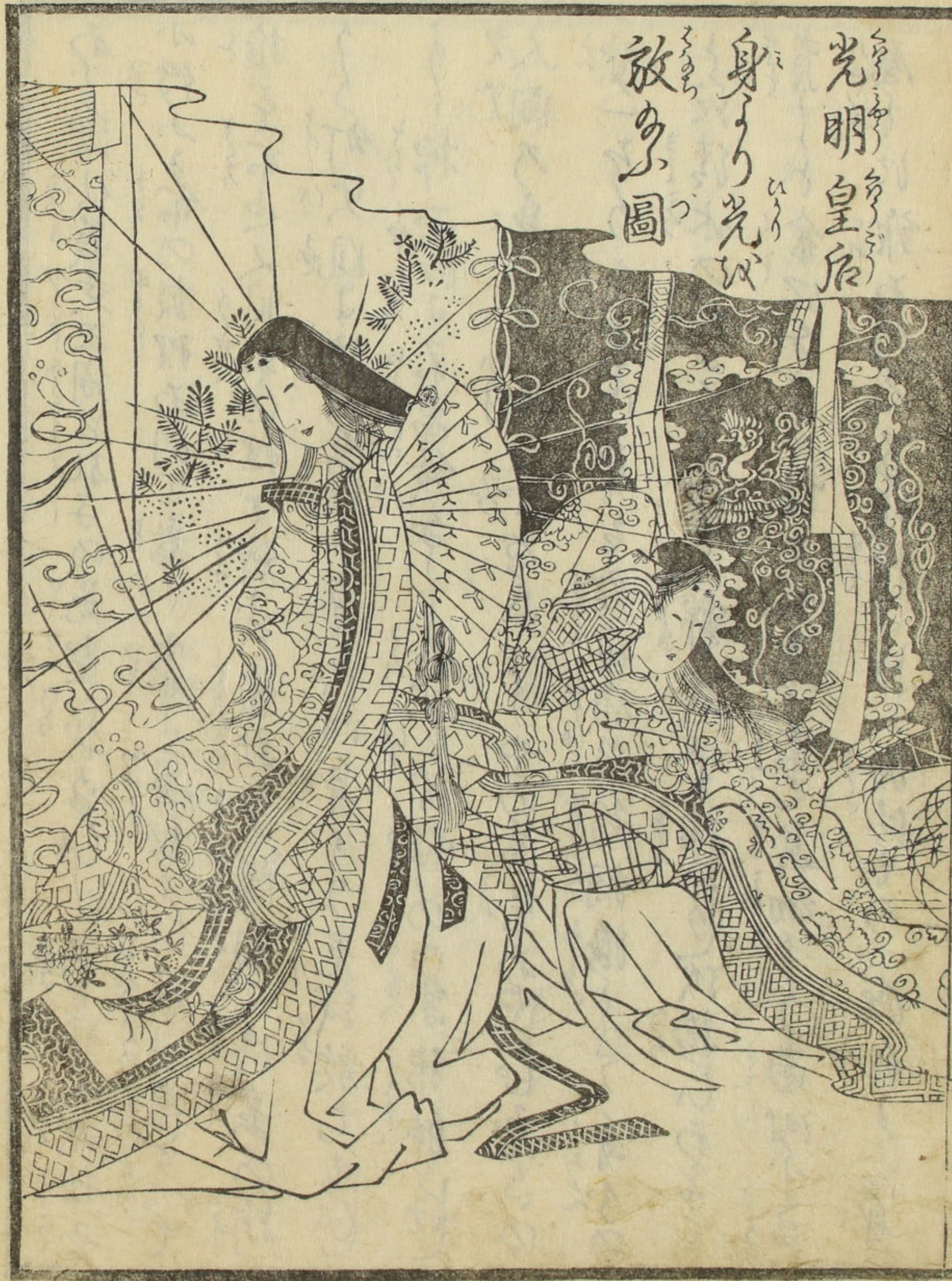
易の術を是を悟まんあるは上の上の術を以てふ
 が不為といふは謂を交易教を河圖の數に配り法範を
 洛書の數に配りて其の吉凶悔吝を以て之を運天地の
 理を以て人事以配りてその以て鬼神も及び履くべき處
 を知ると日月の出入るを以て之を以て海今日の理に
 を易數以て人ごとく兼おるト者あると完尔と云ふは滿
 府の諸の殿上人玉簾が述べた理にわらへて其も無香爽
 ありて感物一恭親が言ふとと聖皇をのんでひらる
 恭親耻辱を受る事加茂大明神掬宣
 時小恭親西に和坂を以て大少を以て遂に某が幼文の首に

平之清

平之清

ありて伏羲文王周孔子の先聖弘くありて易道又我神を
 小傳よりその數理を以て悉く家は奥秘にして其此道を以て
 推して不也又目前の理を以て當社を陽殿は清葛の折
 々灯火風は消くありて其も六の身より光は放ちあり
 り抑正法は不思議を以て我も人も神の心業を神にけ
 人間乃身より光の出るを以てやわらふ是わらひむるの
 才一なり元素の身より右邊將並初網渡くする身分の
 と此清水のわらふを以て錦はつと捨りて以捨いありて
 育くと余はわらふは慥に知るべき其初より苗はふる
 履くに誰わらふは以捨るは海法をわらふ所は是の身

大之清



光明皇后
身より光り
放多圖

三國女史傳一糸卷之壹

三才圖會



悪鬼群て 経 續 圖



を知り多ぶるゆへ荊棘をうけ首を執へ被布をうりあつら
 清濁の事も止まらざれば思ひたふさば行て見多ひる
 に悪鬼ども群を布り唯今經法よみお海未あつらや
 今又我は清濁してせせま頼めいさきていさ我け経食
 物をく肌はるんで言清は人間の内をわしめてもよ
 と釋迦は法をうりて則ちうらう股は裁切り其肉をあり
 あれが鬼ども信じ食ひ種法清む釋迦して是を覺あふ
 今の四句の文是也して佛法は弘む道とありあつら月界
 長者とつら新曲波乃の者ありがて事ありがて何卒樂
 を佛道は入まんと思ひ阿羅漢達は連て毎日長者が

門小きて被謝を乞ふま下一粒一錢も施さばはそれも獲る
 毎朝至りあつら河福の清小波入つらまのて斗を
 つらとつら新見とあまひのりそ其乃のものを善乃は引
 入まあが諸人のうら快はる思ひ言世あつらあつら
 空は花乃はる異形をえ死病とあつらと云あつら一は長者
 が老人の娘を病とあつら空あつら鬼女を見付けは惣身
 瘡は生じ既命危くつらあれは流石新見の長者は
 と子小ひされておあつら所にもおあつら之釋迦を
 病を平愈あつらば老人頼りあつら空あつら娘小あつら
 親公新見波乃を志まてあつらして願ひはあつらあつら

七日の申に申渡さば今日より公を治す慈悲を施す
 三宮代位ト云ふ所なることと宣ひしを嫌ふいざん
 一公は慈悲を申す三宮代位ト云ふは七日小満の夕方嫌が
 病を爰見しとて平愈あり是より長老佛法の妙ありと
 を爰めし親迦佛の心守りしとて佛法の傾き皈依し
 賜りあふ慈悲者となり祇園精舎以造堂して佛を
 正法を以て法を弘く令その心も弘まりかて正法のすめ
 乃為ふかる不測を申すあしそ終に佛法を記し三國に
 弘く是の如くして又河を正法は不測はと云ひて
 うづり身より弘く光も光明智后の光も親迦佛也

あれ異形のもの代唐空は飛空ありてめ悪病をうけざるも
 ことごとく是乃理を思ふ不思儀とて正法は是れも正法は
 不思儀ありとて一言申向禱をせし水の流れ毎口
 に泰親の抱身つりて汗を流し路を低て閉口を玉藻のあ
 声高く又つりてわら連より聲を聞かむ初めは
 あつては海無難とてうらむ口は口開てをる代りも
 結く舌をけんやといひて此の中にもあつてを答ける
 玉藻の茶いたたそとわらんよと退けしうりて業を勤む
 乃とて恥しめ附くは因燒さるまづくと入る列座乃
 公卿殿上人玉藻の茶の英明智識舌を巻くを感かそ

三國天帝專下扁舟之室



一

書林

異形
虚空を
飛行する
閣



三國女仙一翁老之堂

三

書林

加茂明神
恭親が
僕童に物で
説宣の圖

